

『自分の弱さを誇る人』（Ⅱコリント 10:1～18・12:9）

【開会聖句】

12:9 しかし主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。わたしの力は弱さのうちに完全に現れるからである」と言われました。ですから私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。

<序論>

・「Ⅱコリント」からの二回目です。この手紙の特徴の一つは、語られているテーマがそれぞれの部分で異なっていて、その違いがはっきりしている、ということではないかと思えます。8章と9章では、当時、困窮していたエルサレム教会への支援（献金）の問題が主題として取り上げられています。しかし、10章になって主題ががらっと変わります。9章と10章の間には、内容的に見て別の手紙（？）と思えるような大きな違いがあり、10～12章までの主題は、パウロ自身の使徒職の正統性についてなんです。

<本論>

1. パウロの使徒職

使徒（アポストロス）というのは、狭い意味では、あのイエス様の12人の弟子たちのことを指しますが、その解釈に従えば、パウロは使徒に含まれないことになります。しかし、広い意味では、その原語の本来の意味である「遣わされた者」「キリストの使節」ということだと思えます。「ルカの福音書」や「使徒の働き」などを書いたと言われているルカは、十二使徒ではなかったパウロやバルナバのことも使徒であると書き残しています（使徒 14:14）。それではパウロ自身は使徒についてどのように考えていたのでしょうか？その一つは、使徒とは復活のキリストの証人であるということ（Ⅰコリ 9章）。そして、二つ目は、キリストご自身から使徒として召された者であるということ（使徒 26章）。ですからパウロは、使徒を12人、或いは自分も含めた13人に限定してはいないんです。そのあたりの厳密な定義、線引きについては、今となってははっきりしないところもあるんですが、いずれにしても、前回の説教でお話ししましたように、当時のコリント教会には、パウロが使徒であるということに疑いの眼差しを向ける人たちがいた。パウロはそんな人たちに向かって、箇所によっては、感情的と言うか、かなり激しい口調で弁明するのですが、それは彼らの背後に、所謂「偽使徒」と呼ばれるような人たちがいたからなんです（Ⅱコリ 11:13）。彼らはユダヤ人キリスト者だったみたいですが（同 11:22）、今日のパウロのことばを借りれば、自分自身を推薦する者であり、互いを比較し合って限度を超えて誇る者であり（同

10:13)、要するにコリント教会でいばっていたんですね (同 11:20)。

2. パウロの皮肉

それにしても、今日の最初のみことばは面白いなと思いました。

『さて、あなたがたの間において顔を合わせているときはおとなしいのに、離れているとあなたがたに対して強気になる私パウロ自身が、キリストの柔和さと優しさをもってあなたがたにお願いします』(Ⅱコリ 10:1)。

これは恐らく、偽使徒たちが言っていた自分に対する批判を、パウロが皮肉としてそのまま書いたのではないかと思われます。そして、その批判の内容が窺えるようなことばが 10 節にあります。

『「パウロの手紙は重みがあつて力強いが、実際に会ってみると弱々しく、話はいしたことはない」と言う人たちがいるからです』(同 10:10)。

誰にでも得手不得手というものはあると思いますが、あの大伝道者パウロも、面と向かって人と話すのは、どちらかと言うと苦手だったのかもしれませんが。パウロがコリント教会を去った後、アポロという人が同じコリント教会で伝道しました。パウロが、『私が植えて、アポロが水を注ぎました』(Ⅰコリ 3:6a) と言ったあのアポロですが、彼はたいへん雄弁だったとルカは記していますので、もしかしたらコリントの人たちは、そのアポロと比べて、パウロのことをそのように言ったのかもしれませんが。そのような批判に対してパウロは次のように反論します。

3. 肉にあつて歩んでも、肉に従つて戦わない

『私たちが肉に従つて歩んでいると見なす人たちに対しては、大胆にふるまうべきだと私は考えていますが、そちらに行ったときに、その確信から強気にふるまわないですむように願います』(Ⅱコリ 10:2)。

そして、3 節。

『私たちは肉にあつて歩んではいても、肉に従つて戦つてはいません』(同 10:3)。

日本語では同じ「肉」ですが、3 節前半の「肉 (サルクス)」は、文字通り人間の肉体という意味です。しかし、2 節と 3 節後半にある「肉」は違います。それは人間の罪を表しています。パウロは、「確かに私たちも肉体を持った普通の人間ですが、私たちの信仰の戦いは罪 (の性質) による戦いではない」と言ってるんですね。4 節以降の『私たちの戦いの武器は肉の物ではなく～』ということばが、そのことを示していると思います。確かに、私たちの信仰の戦い、イエス様をお伝えしようとする時に用いるべき武器は、私たち人間のことばや知恵などではありません。それは、神の力、聖霊の働きであり、5 節後半にあるように、その神の力が、すべてのはかりごと、人間的な思いを取り押さえて、人間の魂をキリストに服従させてくださるんです。まさにパウロが、「Ⅰコリント」2 章 4 節 5 節で、『私のことばと私の宣教は、説得力のある知恵のことばによるものではなく、御霊と御力の現れによるものでした。それは、あなたがたの信仰が、人間の知恵によらず、神の力によるものとなるためだったのです』と言っ

た通りです。

<結論>

そして、今日の 10 章の後半で、パウロは、自分は何を誇るのかということについて述べています。その結論は 17 節です。

『「誇る者は主を誇れ。」』（Ⅱコリ 10:17）ということですね。

今日の開会聖句、12 章 9 節のみことばは、皆さんもそうかもしれませんが、私の大好きな聖句の一つです。このことばに、私自身、何度も何度も励まされてきました。その前の 12 章 7 節でパウロは、『私は肉体に一つのとげを与えられました』と言っていますが、それは眼の病気か、癩癩か、それともまた別の病気であったのか、色々と言われていますが、ハッキリとは分かっていません。そして 8 節には、『この使い（とげ）について、私から去らせてくださるようと、私は三度、主に願いました』とあります。イエス様も、十字架に架けられる前夜、あのゲッセマネで、「わが父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしが望むようにはなく、あなたが望まれるままに、なさってください」（マタイ 26:39）と三度祈られたと、聖書は記しています。

以前の説教で「ええカッコしい」ということばを使いましたが、私たちの本音、ええカッコしいじゃないありのままの心は、涙を流すような人生は歩みたくない。そんな人生はできるだけ避けて、明るい、光り輝くところだけを歩みたい、ということだと思います。それが、私たちの人情と言うか、嘘偽りのない正直な気持ちだと思います。ただ、それと同時に、今朝、私たちには、認めざるを得ないことがあると思うんです。それは、私たちの信仰の最終的な目標というのは、自分の願いが叶えられたり、祈りが聞かれることではない。そうではなくて、この私の中で神がどのように働いてくださったのか、神の力がどのように現れたのか、ということなんです。私たちはよく勘違いをしてしまいますけれども、それは自分の信仰が素晴らしくなれば、神はきっと病を癒し、自分の祈りを聞いてくださる、と。しかし、そうじゃないと思うんです。素晴らしい信仰者というのは、たとえ病が癒されなかったとしても、祈りが聞かれなかったとしても、「わたしの恵みはあなたに十分である。わたしの力は弱さのうちに完全に現れるからである」という主のみことばを、信じ受け入れる人のことだと思うのです。それは決して、負け惜しみでも、やせ我慢でもないでしょう。パウロは、『私たちは、この宝を土の器に入れて 있습니다』（Ⅱコリ 4:7a）と言いましたが、私たちも、そのことに気づかされた時、自分の弱さを誇る人、言い換えれば、本当の意味で神の力を誇る人になることができるのではないのでしょうか。